

「確認くん」を活用した入学前教育 A Pre-entrance Education Program Utilizing “Kakunin-Kun”

中島 彰子(Akiko NAKAJIMA)

CELL 教育研究所 (CELL Research Center for Educational Development)

入学予定者の多様化する習熟度と学力格差の拡大が問題となっている中、入学予定者に大学に必要な基礎学力を身につけさせるだけではなく、大学の教育システムへスムーズに誘導できるような入学前教育の体制づくりが重要な課題となっている。

大手前大学では 2009 年度入学予定者対象の入学前教育において、入学後も頻繁に利用する携帯電話対応型 LMS「確認くん」を活用し、入学予定者の学習意欲の持続を目指した。毎週「確認くん」を通じて課題と解答を配信し、1 週目から 3 週目までの学習を終えた後、4 週目の確認テストで学習内容の習得度を測定するという流れは、大手前大学の初年次教育システムと連動している。

本稿では「確認くん」を活用した入学前教育システムの構築によって、いかに大学教育に必要な基礎学力と教育システムの定着を実現し、大学生活へのスムーズな移行へと繋がったのかを考察する。

キーワード：入学前教育，可視化，簡便性

1. はじめに

多様な入試形態により入学予定者の基礎学力低下が問題視されている昨今、多くの大学で入学前教育が行われている。入学前教育を通じて基礎学力の定着を図るのみならず、合格が決定してから入学までの期間を無為に過ごすことなく、学習意欲を持続させることも重要な目的と考えなければならない。

場所を選ばず、好きな時間に、何度でも学習できるという利点から e-Learning を入学前教育に導入している大学も増えているが、従来の対面式授業とは違い、教員が直接学習を支援できないなどの問題もある。実施目標や状況に応じて使い分けたり、どのように学習者の意欲を長期にわたって持続させるかなどの工夫が e-Learning 活用における今後の課題だといえよう⁽¹⁾⁽²⁾。

大手前大学（以下、本学）では上述した問題への対応策として、大学側と学習者の双方向のコミュニケーションによる学習支援を視野に入れ、2009 年度の入学前教育においてさまざまな仕組みを採用した。そのひとつとして、入学後も頻繁に利用する携帯電話対応型 LMS「確認くん」の活用が挙げられる。

本稿では「確認くん」を活用した本学の入学前教育の概要を報告し、基礎学力と初年次教育システムの定着および学習意欲の持続にどれほど効果的であったか、その成果を検討する。

2. 携帯電話対応型 LMS「確認くん」

学習を支援する携帯電話対応型 LMS「確認くん」は、本学が独自に開発と運営を行っており、初年次

必修科目において活用されている。本学では学生の学習活動を可視化するため、出欠状況や課題取組み状況を○や×などの記号で表す「スタンプ制」を設けている。担当教員は管理画面から学生個別のスタンプを把握することができるため、適切なフィードバックが可能となる。

学生は PC や携帯電話から、「確認くん」にアクセスできる。個別のページにはスタンプだけではなく、学習状況に応じて配信される各科目からのお知らせやメッセージも表示されるので、学生はいつでもどこでも「確認くん」を通じて自分の学習状況が管理できるシステムになっている。

3. 入学前教育の概要

本学では 2009 年度入学予定者を対象に、「確認くん」を活用した入学前教育を実施した。今回の取組みでは、入学後に必要な基礎学力の定着、本学の教育システムへの誘導、学習意欲の持続を目指した。初年次必修科目「日本語表現」、「英語表現」、「情報活用」のコーディネーターが中心となり、課題の作成、入学前オリエンテーションにおける概要説明、「確認くん」による課題配信、学習状況データ管理、メッセージ配信、質問対応、スクーリングなどを行った。詳細を以下に示す。

3.1. 実施方法

2009 年度入学予定者を対象に、第 1 期 528 名、第 2 期 395 名と、合格決定時期に応じて対象者を 2 期に振り分けた。総対象者は 844 名であるが、第 1 期対象者のうち 79 名は入学前教育に参加しなかったため、第 2 期の対象にもなっている。実施期間は

第1期が2009年1月31日(土)から3月21日(土)の7週間、第2期が3月7日(土)から3月28日(土)の3週間である。対象者には本学で行われた入学前オリエンテーションにて、入学前教育の概要及び課題が掲載された小冊子を配布し、説明を行った後、実際に「確認くん」を通じて、お試し課題にも挑戦してもらった。

入学後の教育システムへのスムーズな導入のため、実施科目は初年次必修科目である「日本語表現」、「英語表現」、「情報活用」の3科目とした。課題作成は3科目のコーディネーターが行い、入学後の授業に順応できる内容に加え、対象者が楽しく学習できるテーマを取り入れるように努めた。課題は1から3まであり、事前に配布された小冊子を見ながら解答するものである。課題は1週間毎に「確認くん」から配信し、4週目には課題の内容が理解できているかを診断するテストを課した。1週目から3週目までの学習内容に関するテストを4週目に行い、習得度を測定するという流れは、初年次必修科目の教育システムと連動している。

対象者は「確認くん」上で課題を提出することができる。入学後のシステムでは課題にクリア基準が設定されており、それを満たしていないと不合格になる。しかし今回の入学前教育では学習者の動機づけを促すため、課題を提出すると即座にスタンプが○になり、期限を過ぎると課題の提出ができないシステムを採用した。

入学前教育における学習活動のまとめとして、最後の週にスクーリング(登校日)を設けた。スクーリングでは初年次教育システムの概要説明と3科目の内容を90分にまとめた特別授業を行い、対象者の保護者も参加可能とした。特別授業は1日につき3クラス開講し、学習状況に応じて出席するクラスを振り分けた。第1期対象者は3月20日(金)、3月21日(土)のいずれか、第2期対象者は3月27日(金)、3月28日(土)のいずれか1日に出席することが求められた。

3.2. 学習支援

従来の対面式授業とは違い、入学前教育では学習者に直接支援することができないため、いかに学習者の動機づけを促すか、学習意欲を持続させるかが大きな問題である。今回の取組みでは、単位認定や入学後の成績に反映させるなどの外的動機づけはできなかったが、学習支援の一つとして質問受付を行った。具体的には入学前教育専用のメールアドレスを活用し、なるべく24時間以内の返答を心がけた。メールに加えて、電話での対応も行った結果、両媒体を通じて約300件の問い合わせがあった。各科目のコーディネーターが学習者全員の学習状況データを一括管理していたため、適切な対応を行うことが

できた。

「確認くん」上での学習支援としては、継続的な学習を促すため、定期的に学習状況に応じた個別メッセージの配信を行った。また、スクーリングの日程など、大学からの重要なお知らせを配信したことで、入学前の段階から「確認くん」へのアクセスが定着したといえよう。

これらの学習支援によって、入学前の段階から大学側と学習者の双方向コミュニケーションが実現され、継続的な学習を促す環境づくりの仕組みや体制が構築できたと考えられる。

4. 実施結果

入学前オリエンテーション出席者における課題提出状況は、3科目平均で第1期が80.6%、第2期が74.7%であった。第1期の科目別課題提出状況を表1と表2に示す。確認テストの提出率をみると、学習者の意欲が低下せず、実施期間の最後まで維持されていたことがわかる。第1期と比べて第2期の提出率が低い理由として、第2期は入学までの期間が3週間しかなかったことと、入学前教育の実施期間が第1期よりも4週間短かったにも関わらず、課題の量は同じであったため、学習者にとって負担が大きかったからだと考えられる。

表1 課題提出状況(第1期)

	日本語	英語	情報
課題1	81.7%	81.2%	76.3%
課題2	83.4%	80.3%	79.6%
課題3	83.9%	81.7%	80.1%
確認テスト	80.5%	79.6%	78.3%

表2 課題提出状況(第2期)

	日本語	英語	情報
課題1	78.2%	76.9%	76.4%
課題2	71.3%	70.4%	70.4%
課題3	77.3%	76.4%	75.0%
確認テスト	75.9%	73.6%	74.1%

スクーリングの出席率は全体の68.0%であったが、課題提出方法やスクーリングなど、入学前教育の概

要を明示した入学前オリエンテーション出席者中では、94.3%という高い出席率となった。(写真 1)

「確認くん」を利用した入学前教育の取組みを評価してもらうため、スクーリングに出席した対象者にアンケートを実施したので、その結果を示す。

「携帯電話で課題を提出できたのはどうだったか」という設問に対して、91.9%の対象者が「郵送よりも楽で良かった」と答えている。「個別のお知らせや提出状況が確認できたのはどうだったか」という設問に対しては、97.1%の対象者が「すぐにわかるから便利」と答えた。

自由記述形式による回答を以下にまとめた。

- 携帯で課題を送信するというのが新鮮だった
- 自分のペースでできるからいいと思う
- 課題が身近なもので楽しかった
- 自分だけのページがあり、特別な感じがした
- いつでも学習することができ、学習意欲もわく
- 課題提出や、登校日の確認が出来て良かった
- 記述問題は携帯から回答するのが面倒
- 解答を見ながら復習をしづらいので少し不便

解答画面では課題を見ることができなかつたため、復習をする際に不便だというコメントもあったが、ほとんどが好評価のものであった。これらのコメントから、「確認くん」を利用した学習が対象者から高い支持を得ていたことがわかる。



写真1 スクーリングの様子

今回の取組みにおいて、入学前オリエンテーション出席者の課題提出率と、スクーリング出席率は非常に高い結果が得られた。これは事前に入学前教育の概要について対象者に直接明示できたことが大きい

であろう。また、PC を利用できる環境が整っていない学習者が多かったため、PC のみならず、携帯電話からもアクセスできる「確認くん」の活用により、いつでもどこでも定期的な学習が可能な環境づくりが構築できたことも、学習者の動機づけになった。

対象者の学習意欲を持続させるのに有効であったのは、課題を提出すると即座にスタンプが○になるという学習活動の可視化だと考えられる。それに加え、期限を過ぎると課題を提出することができないシステムにより、期限内に課題をこなすという学習習慣をつけさせることに成功し、高い課題提出率にも結びついたのである。

また、人による学習支援に力を入れたことも対象者の学習意欲の持続に大きく影響したといえる。対象者は入学前から大学側と「確認くん」やメール、電話を通じて、双方向のコミュニケーションを取ることが可能であった。課題提出をしていない者には、学習を促す個別メッセージを配信するなどの定期的なフォローがあったからこそ、最後まで高い課題提出率を保つことができたと考えられる。

「確認くん」の活用は学習者だけでなく、大学側にもメリットがある。入学までの長い期間、学習者が毎週課題をこなすとは限らないが、課題配信や提出期限の設定など、「確認くん」のシステムを活用したことで継続的な学習習慣を促すことができた。それに加え、学習状況のデータを一括管理できるため、一人ひとりの学習活動を分析し、個別メッセージの配信や、メールでの連絡など、適切な対応を行うことができたのは非常に効果的であった。

5. まとめ

本稿では、2009 年度入学予定者対象の本学における入学前教育の実践事例を述べ、課題提出率と出席率、アンケート結果から本取組みの成果をまとめた。

学習状況の可視化や個別メッセージ配信など「確認くん」の活用に加え、電話やメール対応など、人による学習支援を行った今回の取組みは、大学教育に必要な基礎学力の定着と初年次教育システムへの誘導のみならず、大学側と対象者の双方向コミュニケーションを実現した。それにより対象者の学習意欲が持続し、大学生活へのスムーズな移行へと繋がったと考えられる。さらに、入学前教育における学習状況のデータは一括管理され、入学後の学習支援活動にも役立っている。それにより、入学後の早い段階から、適切なアドバイスが可能となった⁽³⁾。

今回は課題作成を始め、入学前オリエンテーショ

ンによる概要説明、「確認くん」による課題配信等、科目コーディネーターが中心となり学習支援活動を行ってきたが、今後は、教員やチューター、スクールカウンセラーなど、入学前教育に携わる人材を増やし、人的学習支援体制を拡大していくとともに、より充実した入学前教育プログラムの構築を目指してゆきたい。

6. 謝辞

本稿で述べた入学前教育を行うにあたり、ご尽力を頂いた毛利美穂氏、近藤伸彦氏、奥田雅信氏、本田直也氏、石毛弓氏、ならびに大手前大学の関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

参考文献

- (1) 川西雪也ほか (2008) e-Learning を活用した入学前教育に関する実証研究. メディア教育研究第 5 巻第 1 号, 87-95 頁。
- (2) 小松川浩 (2009) リメディア教育向け e ラーニング活用 (千歳科学技術大学での実例を介して). リメディア教育学会誌第 4 巻第 1 号, 25-30 頁。
- (3) 近藤伸彦ほか (2009) 多様な学生に対応する初年次教育プログラム - 入学前教育からはじまる一貫した学習支援 -. 初年次教育学会第 2 回大会発表要旨集, 92-3 頁。

SUMMARY

As proficiency of the prospective university students diversifies and individual difference in their scholastic ability is getting greater, it is an issue of great importance how to organize a pre-entrance education system which could help build up a basic scholastic ability necessary for the university education and induce the prospective students smoothly into the university curriculum.

In Otemae University we have adopted a program of pre-entrance education for the 2009 prospective students utilizing a mobile phone adaptable LMS “Kakunin-kun”, which can be utilized frequently also after the entrance, with an aim to promote and sustain the learning motivation of the entrance-expected students.

In this program assignments and answers were delivered to each person via “Kakunin-kun” every

week and after the students finished the study for the first 3 weeks, we measured the degree of learning in an achievement test made in the 4th week. This workflow correlated systematically with the first-year education system of the university.

In the present paper we discuss how the new program of pre-entrance education utilizing an LMS “Kakunin-kun” could help us to establish a solid pre-entrance education in which the students acquire the basic scholastic ability necessary for the post-entrance education at the university and are smoothly induced to the initial year curriculum.

KEYWORDS: PRE-ENTRANCE EDUCATION PROGRAM, VISUALIZATION, SIMPLICITY

Akiko Nakajima: A Pre-entrance Education Program Utilizing “Kakunin-kun” Otemae University, 2-2-2 Inano-cho, Itami-chi, Hyogo 664-0861 Japan
